国語科学習指導案

指導者　林　大智

１　日　　時　　令和６年　１１月　７日（木）　第５校時

２　学　　級　　第５学年　１４名

３　単 元 名　　『港環境白書』を作り、環境問題についてお家の人に報告しよう

教 材 名　　「固有種が教えてくれること」（読むこと）

「自然環境を守るために」（書くこと）

「統計資料の読み方」

４　単元目標

◎原因と結果など情報と情報の関係について理解することができる。　［知識及び技能］（2）ア

○日常的に読書に親しみ、読書が、自分の考えを広げることに役立つことに気づくことができる。

［知識及び技能］（3）オ

◎引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができる。　［思考力、判断力、表現力等］B（1）エ

◎目的に応じて、文章と図表などを結びつけるなどして必要な情報を見つけたり、論の進め方について考えたりすることができる。　［思考力、判断力、表現力等］C（1）ウ

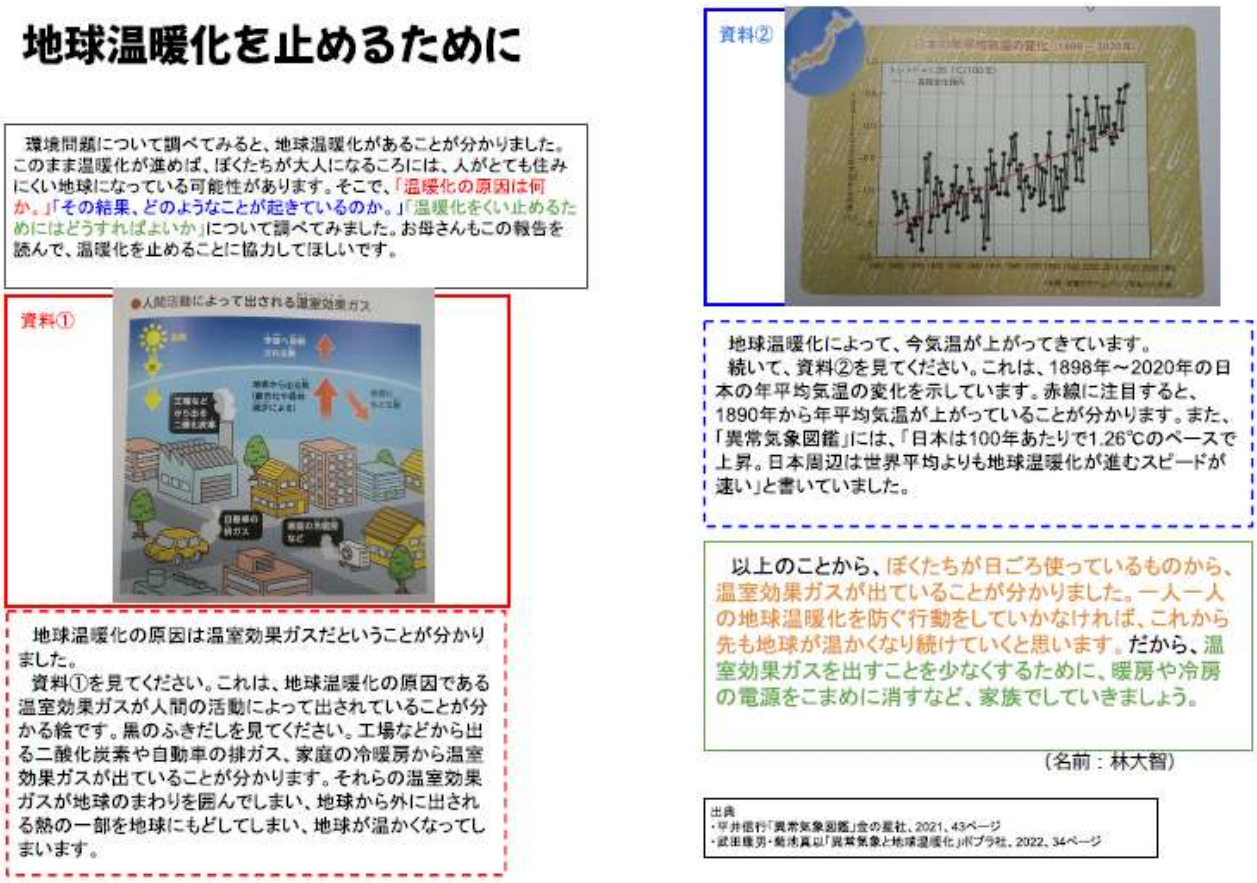
○事実と感想、意見などとの関係を叙述を基に押さえ、文章全体の構成を捉えて要旨を把握することができる。　［思考力、判断力、表現力等］C（1）ア

○言葉がもつよさを認識するとともに、進んで読書をし、国語の大切さを自覚して思いや考えを伝え合おうとする。　［学びに向かう力、人間性等］

５　単元で取り上げる言語活動について

言語活動について	環境問題について調べて考えたことを調査報告文（『港環境白書』）として書く。 （関連：［思考力、判断力、表現力等］B（１）エ、C(１)ウ）
特徴	環境問題について調べて考えたことがお家の人に伝わるように、『港環境白書』〔初め（解決したい環境問題と問題と思う理由）－中（環境問題の原因と現状）－終わり（考えたことやこれからの取り組み）〕を作る。
単元目標との繋がり	読む目的をはっきりさせて「固有種が教えてくれること」を読むことで、「文章と図表などを結びつけるなどして、必要な情報を見つける」ことを実現できる。『港環境白書』を作る際に、「固有種が教えてくれること」で見つけた工夫を活かすことで、「引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫する」ことを実現できる。 ［思考力、判断力、表現力等］B（１）エ、C（１）ウ

［言語活動のゴールモデル］



地球温暖化を止めるために

環境問題について調べてみると、地球温暖化があることが分かりました。このまま温暖化が進めば、ぼくたちが大人になるころには、人がとても住みにくい地球になっている可能性があります。そこで、「温暖化の原因は何か。」「その結果、どのようなことが起きているのか。」「温暖化をくい止めるためにはどうすればよいか」について調べてみました。お母さんもこの報告を読んで、温暖化を止めることに協力してほしいです。

資料①

地球温暖化の原因は温室効果ガスだということが分かりました。
資料①を見てください。これは、地球温暖化の原因である温室効果ガスが人間の活動によって出されていることが分かる絵です。黒のふきだしを見てください。工場などから出る二酸化炭素や自動車の排ガス、家庭の冷暖房から温室効果ガスが出ていることが分かります。それらの温室効果ガスが地球のまわりを囲んでしまい、地球から外に出される熱の一部を地球にもどしてしまい、地球が温かくなってしまいます。

資料②

地球温暖化によって、今気温が上がってきています。
続いて、資料②を見てください。これは、1898年～2020年の日本の年平均気温の変化を示しています。赤線に注目すると、1890年から年平均気温が上がっていることが分かります。また、「異常気象図鑑」には、「日本は100年あたりで1.26℃のペースで上昇。日本周辺は世界平均よりも地球温暖化が進むスピードが速い」と書いていました。

以上のことから、ぼくたちが日ごろ使っているものから、温室効果ガスが出ていることが分かりました。一人一人の地球温暖化を防ぐ行動をしていかなければ、これから先も地球が温かくなり続けていくと思います。だから、温室効果ガスを出すことを少なくするために、暖房や冷房の電源をこまめに消すなど、家族でしていきましょう。

（名前：林大智）

出典
・平井信行「異常気象図鑑」金の星社、2021、43ページ
・武田康男・菊池真以「異常気象と地球温暖化」ポプラ社、2022、34ページ

６　単元について

（１）単元構成について

本単元は、教材「固有種が教えてくれること」（読むこと）と「自然環境を守るために」（書くこと）を組み合わせた複合単元である。自分の家族の環境問題に対する意識を事前調査し、その結果を基に、お家の人に報告したい環境問題について、複数の本を読む。そして、分かったことなどをお家の人に報告する文章として『港環境白書』の１ページを書く言語活動を設定している。一人ひとりが書く『港環境白書』の１ページは、「初め（調査のきっかけ）」－「中（調べて分かったこと）」－「終わり（考えたことやお家の人に伝えたいこと）」といった構成である。

教材「固有種が教えてくれること」（読むこと）では、動物学者で「ざんねんないきもの事典」などを監修している今泉忠明が「固有種がすむ日本の環境をできる限り残していかなければならない」という主張をしている。その一つの考えを述べるための根拠として、「中」で図表やグラフ、地図、写真といった多様な資料を提示している。また、資料と文章とを対応させた表現の工夫もされており、読者を引きつけ、スムーズに理解できる文章となっている。こうした特徴から、資料を用いた論の進め方や資料と文章を対応させた書き方の工夫を見つけるという目的をもって読むことに適した教材である。

「自然環境を守るために」（書くこと）では、「固有種で教えてくれること」で学習したことをいかして、お家の人に報告したい環境問題について調べ、自分の伝えたいことが伝わるように、資料を用い

て書き表し方を工夫して書くことをねらいとしている。光村図書出版の教科書に示された作例は、意見文として書かれているが、今回は調査報告文としてまとめる。

また、本単元では、自分たちで教材文や環境問題について書かれた本を読む際、図表やグラフなどに多く触れる。その際、単位や目盛によってグラフや表の印象が大きく異なることや、調べた時期や対象によって結果が異なることなど、統計資料の扱い方に注意する必要がある。そのため、特に気を付けたいグラフなどの読み取りについては、情報「統計資料の読み方」で取り上げている。

単元の学習に入るまでに、社会科を中心としてさまざまな統計資料に触れ、資料から分かること、そこから考えられることなど、自分の考えをもてるようにしておく。また、学校図書館司書と連携し、環境問題ブックコーナーを設置する。さらに、総合的な学習の時間で、地域の課題解決を環境問題の視点から行う。その際、お家の人が環境問題についてどのような関心をもっているのかについてアンケート調査を行い、ゴールである『港環境白書』で伝えたいきっかけを作る。

第一次では、教師作成のゴールモデルを読み、「資料を使った文章の効果を考えながら読み、それをいかして『港環境白書』を作り、お家の人に報告しよう。」という単元のめあてをつかみ、見通しをもつ。また、情報「統計資料の読み方」で、グラフや表などの資料を読み取る上での注意点を学習する。その後、約１週間のインターバルを設け、この間に自分が『港環境白書』で報告したい環境問題のテーマを絞る。そして、そのテーマを中心として本を読み進めていく。

第二次では、『港環境白書』を作るために、目的に応じて、教材文「固有種が教えてくれること」や複数の本から、文章と図表などを結びつけながら必要な情報を見つけたり、論の進め方を考えたりし、『港環境白書』にまとめていく。複数の本からお家の人に伝えたい内容を選び、『港環境白書』にするためには、色々な資料に当たり、およそ一読してその資料の内容の中心を捉える必要がある。その際に働く読みの力が「要旨を把握する」力である。そのため、教材文「固有種が教えてくれること」を参考にし、文章全体の構成を捉えながら要旨を把握する。その後、本に書かれている要旨を把握しながら、自分の関心のある環境問題のテーマについて読み進めていく。次に、教材文を使って、文章と、図表やグラフ、写真とを結びつけながら、資料の効果について、筆者と読み手両方の立場から考え、『港環境白書』を作る際に資料を使うことのよさに気づく。そこで、改めて『港環境白書』作りに向けて集めてきた情報を見直し、必要に応じて資料を調べて追加取材し、どの資料が必要か判断する。資料が決まると、『港環境白書』を作るための論の進め方と、文章と資料とを結びつける述べ方の工夫を見つけるという目的で、教材文「固有種が教えてくれること」を読む。そして見つけた工夫をいかして、文章構成を考えながら、『港環境白書』を作っていく。

第三次では、完成した『港環境白書』を読み合い、成果を交流する。ここでは、自分の考えが伝わるような論の進め方や書きぶりをしているかを友達と交流し、良いと思ったところを伝え合う。

【ブックリスト】

1	異常気象図鑑	１０	プラスチックモンスターをやっつけよう
2	異常気象と地球温暖化	１１	数字でわかる！こども SDGs
3	地球の危機図鑑	１２	2024 日本のすがた
4	目で見る SDGs 時代の環境問題	１３	こども環境学

5	日本の国土と産業データ	１４	世界を変える SDGs
6	人間が地球の環境をこわしてきた	１５	わたしもできる！世界とつながる SDGs アクション
7	はかってへらそう CO2 1.5℃大作戦 ①はかる編、②へらす編	１６	日本に固有種が多いわけ
8	ごみから考える SDGs	１７	日本にしかいない生き物図鑑
9	ごみを調べよう	１８	日本の固有種①②③

その他、「地球温暖化」「ごみ」「生物の絶滅」に関する本で合計 30 冊ほど用意する。

（２）児童について

「読むこと」に関しては、これまでに説明文「言葉の意味が分かること」で要旨の捉え方について学習している。要旨を捉えるにあたって、筆者の考えの中心は「初め」や「終わり」に書いてあることが多いことや、「中」で理由や具体的な事例を挙げたり、原因と結果を示したりしていることを学習している。しかし、筆者特有の表現が何を意味しているのかなど、筆者の中心となる考えとそれを支える事例との関係などを理解することにまだまだ課題が見られる。また、文章と資料を結びつけて読み、必要な情報を見つけることは本単元が初めである。

「書くこと」に関しては、これまでに情報「目的に応じて引用するとき」や「みんなが使いやすいデザイン」で引用のしかたや目的、調査報告文の書き方を学習している。また、前学年までに調査報告文を書く学習を行っているため、書くゴールの構成はある程度見通しをもちやすいと考えられる。しかし、主に「中」に書く調べて分かったことについて、どのような順番でどのように書いたらよいのかがわからず手が止まってしまう児童も見られた。また、引用することに関しては、引用する目的を明確にできていなかったり、引用した文と、そこから自分の考えたこととを明確に区別して書いたりすることには課題が見られる。

（３）言語活動の充実に向けた港小の取組

【４STANDARD】（「読むこと」の授業を行う際に、必ず大切にしたい４つのこと）

	STANDARD	概要
1	指導事項チェック	学習指導要領解説や指導事項チェックシートを活用し、指導事項を確認し、系統性を意識しながら、教材研究を行う。
2	ゴールモデルの共有	単元の導入時に、児童とゴールモデルを共有し、単元の見通しをもたせる。
3	単元のめあての共有	単元の導入時に、ゴールモデルと共に、単元のめあてを共有し、単元の目標を理解させる。
4	単元計画の共有	ゴールモデルや単元のめあてと共に、単元計画を共有し、単元の見通しをもたせる。

【７CHALLENGE】（単元や児童の実態、担任の思いによって、選択しながら大切にしたい７つのこと）

	CHALLENGE	概要
1	単元計画の充実	カリキュラム・マネジメントや単元計画の立て方の工夫など、単元目標を達成するために、効果的な単元構成を行う。
2	目的・必然性の設定	単元のゴールとして、学級外の相手に発表するなど、目的や必然性をもたせる。
3	読書活動の充実	学校図書館の活用・図書館司書との連携・並行読書等を通して、多くの本と出合い、言語能力の育成を図る。
4	交流の場の設定	自分の思いや考えを伝え、学びあえる児童の育成を目指し、目的をもって、交流の場を設定する。
5	タブレット端末の活用	実践を共有しながら、つけたい力をつけるため、効果的な活用方法を工夫していく。
6	各学年オリジナルチャレンジ	言語活動を充実させるため、各学年の実態や発達段階に応じた取り組みにチャレンジする。
7	実践の積み上げ	単元計画や板書画像、並行読書リスト、ゴールモデル、ワークシートなどを残し、今後の授業改善にいかす。

（４）指導について

本単元が始まるまでに、社会科を中心としてさまざまな統計資料に触れ、その資料からわかること（事実）とそこから考えられることや疑問をもつこと（意見）ができるように学習してきたことで、資料に触れることへの抵抗感を和らげている。また、総合的な学習の時間と連携することで、教科横断的な学びを実現し、より効果的な単元構成にしている。【CHALLENGE１】具体的には、環境問題の視点から地域の課題解決をすることをゴールとし、まずお家の人の環境問題の意識調査を行う。それにより、各家庭でのゴミの問題や異常気象などへの関心の度合いを知ることができ、児童が本単元で調査していく環境問題について、きっかけをもちやすくする。【CHALLENGE２】さらに、学校図書館司書と連携し、児童が関心をもちやすい環境問題・SDGs に関する本を種類別に集め、教室内にブックコーナーを設置することで、いつでも手に取りやすい環境にする。また、並行読書マトリクス表を作り、読んだ本が分かるように可視化する。【CHALLENGE３】

第一次では、教師のゴールモデルを紹介し、児童が学習活動のイメージをもつことができるようにする。また、単元のめあてをおさえ、単元計画を立てる。単元計画を共有する際には、ゴールモデルを見せながら、書くためにどんな内容をどんな順番で学習するとよいか考えさせながら児童と一緒に計画を立てることで見通しをもてるようにしたい。また、単元の構成がイメージできるように単元表として提示するのではなく、読むことと書くこととのつながりや学習の目的が分かるように単元マップとして単元計画を提示する。【STANDARD３、４】次に、本単元で触れていく統計資料の扱い方については、教科書で学習した後、実際に複数の本から統計資料を見つけ、単位や目盛り、調べた時期や対象を確かめてみることで、それらを注意しながら複数の本の統計資料を読めるようにする。その後、１週間程度のインターバルを設け、環境問題について書かれた本を読むことで、自分がお家の人に報告したい環境問題

のテーマをじっくり考え、「伝えたい」という思いをもてるようにしたい。また、この際、朝の時間などの学級の時間で読んだ本で分かったことやそれがどの資料からわかるかなどをペアで交流するなどして、環境問題について興味喚起し、考えが広がるようにしたい。

第二次では、『港環境白書』を書くために、教材文や複数の本から、文章と図表などの資料と結びつけながら、必要な情報を見つけていく。『港環境白書』を書くためには、大きく分けて３つのステップをふむ必要がある。まず始めに「自分が伝えたいことに合った資料を選ぶこと」。２つ目に、「『港環境白書』の書き方を学ぶこと」、３つ目に、「学んだ事をいかして『港環境白書』を書くこと」である。

１つ目の「自分が伝えたいことに合った資料を選ぶ」ためには、本の中で書かれた内容の要旨を捉える必要がある。そこで、本のページを全て読み込むのではなく、あるまとまりの文章から内容の中心を捉えられるようにするという目的をはっきりさせて、第４時で教材文「固有種が教えてくれること」を用いて既習事項を確認しながら要旨を捉える。そして第５時で、本に書かれている要旨を把握しながら、自分が伝えたいことに合った内容となりうるページを選ぶ。次に教材文を用いて、文章と図表などの資料とを結びつけながら読み、資料を用いた筆者の意図と読み手への効果を考える。その際、教材文で示された資料がどの段落のどの文とつながっているのか、線でつなげるなどして視覚化させる。そして、第７，８時で『港環境白書』を作るために必要な情報を見つけ、お家の人に報告したい資料を選べるようにする。

次に「『港環境白書』の書き方を学ぶこと」である。この段階では『港環境白書』で自分の伝えたい資料は選べているが、実際にどのように述べていけばよいか、述べ方の工夫を知る必要がある。そうした目的意識から、第９時で、教材文「固有種が教えてくれること」内の複数の資料の中から自分が使いたい資料の種類の段落を選び、述べ方の工夫を見つける。こうした教材文を読む目的をはっきりさせることで、自律的に学習ができるようにする。

最後に「学んだ事をいかして『港環境白書』の書くこと」である。こうした学習後、文章構成をメモしながら、言語活動のゴールである『港環境白書』を作成していく。書くことが苦手な児童に対しては、みんなで見つけた述べ方の工夫を掲示したものを見ながら、どれが自分の文章にいかせそうか選ばせたり、教材文やゴールモデルから書き方の例を示したりするなどして書けるようにしていきたい。

第三次では、作成した『港環境白書』を読み合い、文章と図表と対応した書き方ができているか、資料を用いた書き方の工夫を見つけあったりして成果を交流する。そうした他者評価を踏まえて自己評価し、「できるようになった」という実感をもたせたい。

７　単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①原因と結果と情報と情報との関係を理解している。 （２）ア ②日常的に読書に親しみ、読書が、自分の考えを広げることに役立つことに気づいている。 （３）オ	①「書くこと」において、引用したり、図表やグラフを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫している。 B（１）エ ②「読むこと」において、事実と感想、意見などとの関係を	① 粘り強く文章と図表などを結びつけて読み、学習の見通しをもって、読み取った筆者の工夫をいかして統計資料を用いて『港環境白書』を書こうとしている。

	叙述を基に押さえ、文章全体の構成を捉えて要旨を把握している。　　C（1）ア ③「読むこと」において、目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見つけたり、論の進め方を考えたりしている。 C（1）ウ	

8　指導計画（全１２時間）

次	時	学習活動	指導上の留意点	評価規準 評価方法
事前学習	0	○社会科を中心に、さまざまな統計資料に触れる。 ○環境問題に関する本を並行読書し、興味喚起する。 ○総合的な学習の時間で、お家の人に環境問題の意識調査を行う。	・統計資料から分かること読み取ったり、考えたりする機会を設ける。 ・学校司書と連携し、環境問題に関する本を用意し、「環境問題ブックコーナー」を設置する。	
1	1	○『港環境白書』（調査報告文）の文例を読み、単元のめあてと学習計画を立てる。	・教師のゴールモデルを提示し、児童が単元の見通しをもつことができるようにする。	
2	2	○教科書 p. 165 の「統計資料の読み方」に書かれていることを確かめる。	・今後、教材文や本で出てくる資料を読み取る際にいかすよう促す。	
		○約１週間のインターバル ・書きたい環境問題のテーマを決める。	・並行読書マトリクスを活用する。 ・テーマを地球温暖化、ゴミ問題、生物の絶滅に絞り、選びやすいようにする。	□日常的に読書に親しみ、読書が、自分の考えを広

	3	○調査報告文に書く環境問題のテーマを明確にし、自分の目的に合った本を選ぶ。 ○環境問題について自分の考えを持ち、『港環境白書』の初めを書く。	・「このまま○○（環境問題）が進むと、○○になる」という書き方を示して、自分の考えをもちやすくする。	げることに役立つことに気づいている。 ［知識・技能②］ （発言・記述）
	4	○自分が選んだ本の要旨を把握する力をつけるために、教材文の要旨を捉える。	・筆者の考えが書かれている段落に着目させ、文章構成を押さえる。 ・中が２つに分かれており、「原因」と「結果」の関係を捉えさせる。	
	5	○本に書かれている要旨を把握し、自分の考えにふさわしい情報を集める。	・本の中にある資料から読み取れることを必要に応じて付箋に書くなどして、情報を集めさせる。	
	6	○教材文を使って、文章と図表などの資料とを結びつけながら読み、資料のもたらす効果について、筆者・読み手両方の立場から考える。	・資料のもたらす効果について、筆者と読者、両方の立場から考えられるようにする。	□「読むこと」において、事実と感想、意見などとの関係を叙述を基に押さえ、文章全体の構成を捉えて要旨を把握している。 ［思考・判断・表現②］ （発言・記述） □粘り強く文章と図表などを結びつけて読み、学習の見通しをもって、読み取った筆者の工夫をいかして統計資料を用いて調査報告文を書こうとしている。 ［主体的に学習に取り組む
	7	○「『港環境白書』に書く環境問題の原因は何か」を説明するのに必要な資料を選ぶ。	・自分の調べたい内容に合った資料を選び、自分の伝えたい資料の候補になりそうなら、その情報の箇所に付箋を貼る。	
	8（本時）	○「『港環境白書』に書く「その結果、どのようなことが起きているのか。」を説明するのに必要な資料を選ぶ。	・自分に必要な情報を詳しく調べたり、どの資料を取り入れることが適切か、友達と交流して話し合ったりできるようにする。	

	９	○『港環境白書』に取り入れてみたい論の進め方や述べ方の工夫を見つけるために、教材文を読む。	・見つけた述べ方の工夫を整理し、『港環境白書』に書く際に活かせるようにする。	態度①］ （発言・記述） □「読むこと」において、目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見つけたり、論の進め方を考えたりしている。 ［思考・判断・表現③］ （発言・記述）
	１０ １１	○『港環境白書』の「中」と「終わり」を書く。	・前時までで整理した述べ方の工夫を掲示し、活かせるようにする。	□「書くこと」において、引用したり、図表やグラフを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫している。 ［思考・判断・表現①］ （記述）
	家庭学習	○自分が作った『港環境白書』の１枚をお家の人に読み聞かせする。	・お家の人に報告書を読んだ感想を書いてもらうようにする。	
３	１２	○作成した『港環境白書』をもとに、成果を交流し合う。 ○この単元での学習を振り返る。	・文章と図表と対応した書き方ができているか、資料を用いた書き方の工夫を見つけあったりする。	

９　本時について（８／１２）

（１）本時の目標

『港環境白書』を作るために、自分の考えの裏付けとなる事実として、どのような情報を書き表すかはっきりさせて、資料を選ぶことができる。

（２）本時の評価規準

『港環境白書』を作るために、自分の考えの裏付けとなる事実として、どのような情報を書き表すかはっきりさせて、資料を選んでいる。

［思考・判断・表現②］Ｃ（１）ウ

（３）展開

○学習活動	●指導上の留意点	□評価 【評価の観点】 （評価方法）
① 単元のめあてや単元計画を確認し、本時のめあてを確かめる。	●単元の学習計画表と教師ゴールモデルを活用し、本時のめあてを視覚的にも把握できるようにする。	
自分の考えが伝わる資料を選ぼう。		
② 自分の考えとそれに合うと考えている資料を読み、確認する。 一人	●『港環境白書』の自分の考えを確認させ、自覚できるようにする。	
③ 調べたい内容に合った統計資料を探したり、友達と交流したりして、自分の考えが伝わる資料をはっきりさせる。 (相談タイム) 一人・ペア	●一人で資料を読む際には、自分の考えが伝わる資料の候補になりそうなら、その情報の箇所に付箋を貼っておく。（必要に応じてメモしてもよい。） ●交流の手順をおさえる。 ①誰がどの本を読んだかを、マトリクスをもとに、子供たちがわかるようにしておく。 ②ペアを組んだら空いている席に横並びに座り、真ん中に本を置かせる。 ③相手の考えを確認してからペア活動を行わせる。 ④聞き手は、「伝えたい事は何？」「それが伝わる資料は？」などと声をかける。 ⑤終わったら、再度マトリクスで相手を見つける。何度も交流して、自分の伝えたい事が伝わる資料を決める。	□『港環境白書』を作るために、自分の考えの裏付けとなる事実として、どのような情報を書き表すかはっきりさせて、資料を選んでいる。 【思考・判断・表現③】 （発言・記述）
④ 本時の学習をまとめ、ふり返る。	●観点を示して、振り返らせる。	

（４）具体的な目指す児童の姿

（ごみ問題の場合の例）ぼくは、今日本でどのくらいのごみの量が出ているのかを伝えたかったので、そのことが分かる棒グラフを見つけることができました。
（地球温暖化の場合の例）わたしは、どれくらい気温が上がっているのかを伝えたかったので、そのことが分かる折れ線グラフを見つけることができました。